Safety Assurance News

島田病院医療安全管理委員会が送る
患者さまと職員の安全に関するニュース
2008　No, 3

●●
特集

「医療の質と安全」の取り組み

●●
FRONT ESSAY
医療の質と安全の追求～学術集会に参加して～

FRONT ESSAY

昨年 11 月に、医療の質・安全学会主催の第 3 回学術集会：テーマ『知の結集と実践の革新』に参加しました。平成 11 年に重大な医療事故が公となり、日本の医療界に安全を確保する上で、大きな課題があることが認識されるようになりました。医療への信頼が大きく揺らいでいる今、医療の質と安全のあり方が鋭く問われています。患者さま本位の質のあり方を確立することは、患者さまと私達の共通の願いであるばかりでなく、安心して暮らせる社会を希求する全ての人々の願いでもあります。医療を必要とする人々は、期待を実現してくれる安全で確かな医療を求めており、私達はその期待に応え、患者さま本位の医療を実現しようと努めながらも、その思いを実現しきれず、期待と現実の間にいつしか乖離が生まれてしまっています。

医療の質と安全をめぐる諸問題は、医療従事者の努力だけで解決するものではありません。医学の枠組みを超え、さまざまな視座と幅広い英知を集めた学際複合的な研究と、その知見を実際の医療に役立てる取り組みの推進を通じて、新しい医療のあり方、システムとして患者さま本位の医療の質と安全を保証する仕組みを創り出す必要があります。そのような研究を推進する場として、この“医療の質・安全学会”は設立されました。この会には医療職はもちろんのこと、医療の質・安全管理者や医療に関わる専門分野での研究、教育、行政等の従事者、社会学、安全工学、情報科学、心理学、法学、経済学、政策学、ジャーナリズム、その他様々な分野の研究者が参加しています。今回の学術集会においては、このような医療の質と安全確保に関わる様々な分野からの研究報告、ベストプラクティスの報告など幅広い視点の“知”を集めて、シンポジウム、教育講演、ワークショップ、ミニコース等が組み立てられ、研究報告や医療安全に関する対策・取り組み・活動とその実践報告がされていました。

実際の医療現場に従事する私達にとって身近な課題に転倒・転落があります。転倒・転落に関する対策は、現場レベルでは多職種が集まってチームを結成し、病棟をラウンドして改善箇所を探して設備整備を行ったり、企業レベルではセンサーマットの有効活用などの取り組みがありました。また、転倒転落要因の分析を行い、アセスメントスコアシートの改良やマニュアル整備等を実践した報告がありました。その他安全管理者による KYT（危険予知トレーニング）等の現場職員への教育システムや、改善策立案の効率化を図れるような分析ツールを開発している IT 関連の取り組みなどもあり、一つのことについて実に多方面の工夫がありました。

このように様々な視点からの研究・報告がありましたが、どの報告についても共通しているものがありました。それは、『チームで取り組んでいる』ということです。それも縦だけではなく横のつながりをもったチームです。みなさんは日々医療の質と安全を意識して仕事をなさっていると思います。その中で、何か一つの取り組みに対しどれだけの分野からのどれだけの“知”を集められているでしょうか？隣の人、他職種と情報交換することで、思ってもみなかった発見があるかも知れません。

今回の研修に参加して、一口に“医療安全”といっても、それに関わる分野の人々は実に幅広く、様々な視点から考えることの重要性を感じました。この学術集会は、来年も平成 21 年 11 月 21～23 日に東京ビッグサイトで開催される予定です。ご興味のある方は参加されてみてはいかがでしょうか。

島田病院　リハビリテーション部　丸山良子

●近畿感染管理ベストプラクティス研究会に参加して

今年度よりリハビリテーション部における感染に対する意識を高めるため、花王主催の感染管理研究会に参加しています。研究会では、感染対策についての講義や実技、ディスカッションが行われ、自施設の感染対策の現状を分析・考察した後、感染対策の遵守率を向上し、感染拡大を防止するために与えられた環境下でできる感染対策ベストプラクティスを作成していきます。

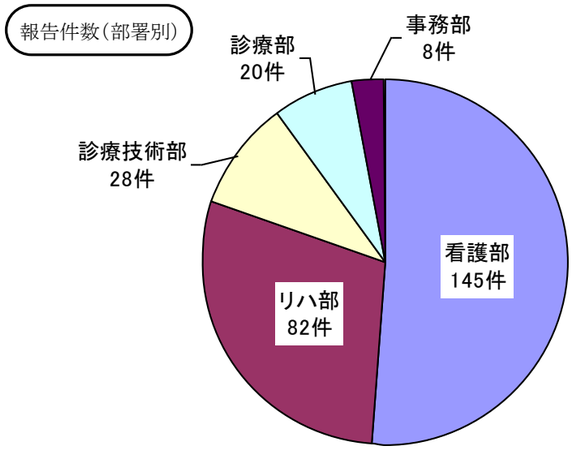
講義を受け、他施設のスタッフの話を聞いていく中で、自分自身の感染に対する認識の甘さを思い知らされました。感染対策の基本となる手洗いの方法やタイミングさえも、自分の認識は本当の感染対策とはかけ離れたものでした。そして、それは他のリハビリスタッフにも言えることだと感じました。リハビリテーション部では、外来患者さまの診療が圧倒的に多くなります。毎日数百人という患者さまがリハビリ室に来られるということは、それに比例した数のウイルスや細菌が持ち込まれているのです。しかし、当初は「1 患者・1 処置・1 手洗い」を徹底できているスタッフはいませんでした。外来と病棟を行き来し、細菌類を持ち運ぶことで感染拡大の原因となる危険性が大いにあるにも関わらず、そういう認識さえ低いのが現状でした。

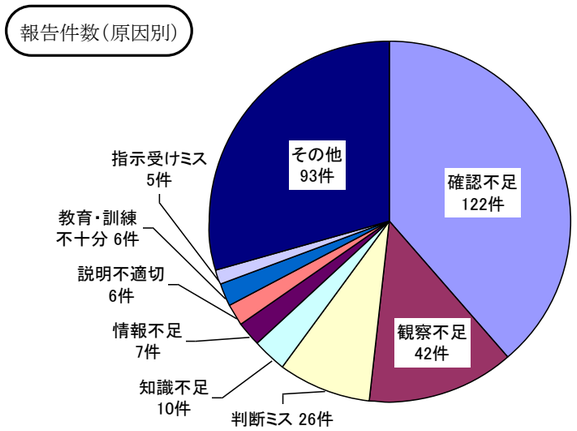
そこで、まずは感染がどのようにして起こるのか、日々の診療でどこに感染のリスクが潜んでいるのか、手指衛生方法などの基本的な所から認識を向上させていく必要があると考えました。しかし、ベストプラクティス作成にあたっては、理想と現実のギャップにも悩みました。感染対策においては「忙しい」「時間がない」は理由にできません。職員が感染対策を遵守することが重要であるため、マニュアルが施設環境とかけ離れていると遵守することが困難になります。まずは、各工程の手順書を作り、その上で可能な環境整備を行い、その環境下でより最善の方法を検討します。このように、自施設に合ったベストプラクティスを作ることで、遵守率を向上させる効果が期待できます。

今回作成した手順書を元に現場の意見を取り入れ、さらにより良いベストプラクティスを検討していきます。そして、職員の感染対策の意識向上を図り、感染拡大ゼロを目指していきたいと考えます。

島田病院　リハビリテーション部　鳥羽愛子

●2008 年度 SA レポート経過報告（4～11 月）





プランナー：リハビリテーション部　愛洲

Safety Assurance News

次号は５月です！

発行人　医療安全管理委員会　編集担当　森下　幸子
発行所　医療法人永広会島田病院内